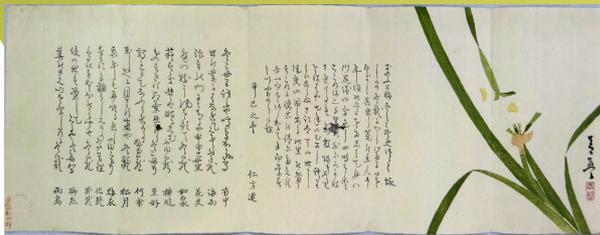
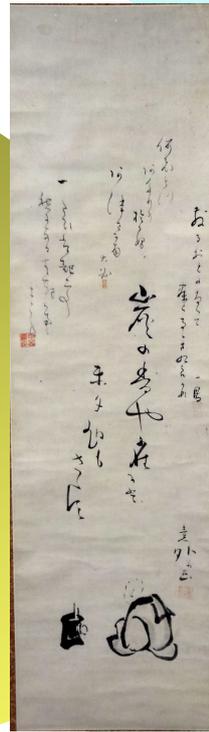


広島県立文書館 第2回収蔵文書の紹介展

古典をいただき
古典に抱かれて
古典の日

広島ゆかりの「古典籍」展

俳諧・狂歌と広島への出版



平成 25 年
10 月 15 日(火)
～ 12 月 27 日(金)

十一月一日は「古典の日」です。国民の間に広く古典についての関心と理解を深めるため、昨年九月に「古典の日に関する法律」が公布、施行されました。今秋、「古典の日」にちなみ、県立文書館・県立広島大学・県立図書館は連携して展示と公開講座を開催します。県立文書館の展示は、収蔵古文書の中から、広島ゆかりの俳諧と狂歌の作品について、江戸時代に出版された整版（木版）を中心に展示します。

江戸時代、江戸や京都・大坂だけでなく、広島・竹原・三次といった地方都市にまで俳諧・狂歌・和歌・漢詩文などの文芸が広まりました。その担い手となったのは教養豊かな富裕な町人や、広島藩士たちでした。俳諧は、松尾芭蕉の門人であった志太野坡に学んだ広島の大賀庵風律らが活躍する頃から盛んとなり、芸備各地で句会が催されたり、句集が刊行されたりしています。

狂歌は、芥川貞佐が備中国笠岡から広島城下広瀬組大年寄芥川家に入家した頃から盛んとなりました。貞佐の門人は数多く、「柳門」と称してその一派は広島だけでなく芸備各地へと広がっていききました。一派は数多くの狂歌集を出版しています。

このように、江戸時代の広島の出版はまず俳書や狂歌集から始まりました。文化・文政期になると、さらに広範囲の分野の書物が、専門の書肆（書物の出版又は販売する本屋）によって出版されるようになりました。

広島は、原爆などにより多くの文化的遺産が失われてしまいました。残された資料から、江戸時代に隆盛を極めた芸備地方における文芸活動の一端をうかがうことができます。

広島県立文書館

〒730-0052 広島市中区千田町三丁目 7-47 TEL 082-245-8444

Eメール monjokan@pref.hiroshima.lg.jp <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/monjokan/>



一 広島 の俳諧 について

俳諧とは正しくは俳諧連歌(はいかいれんが)のことで、和歌から分かれた連歌がさらに分岐してできた遊戯的な文芸です。この俳諧連歌では、五・七・五の句と七・七の句が、複数の作者によって交互に詠まれます。三六句連ねる歌仙形式が一般的で、冒頭の五・七・五の句を発句といいますが、この発句だけを独立させ、その一七文字の中だけで様々な情景や情感を表現させ、俳諧を形式・内容ともに芸術として確立させたのが松尾芭蕉でした。

元禄七年(一六九四)に芭蕉が亡くなると、その弟子たちが蕉風俳諧を地方へ広めます。中でも広島へ特に熱心に伝えたのが蕉門十哲の一人にも数えられる志太野坡(しのだのぼか)でした。野坡は享保年間(一七六〇)から度々芸備を訪れ、その門弟を増やしていきました。その代表格が多賀庵(たがあん)風律(ふうりつ)です。風律は多くの句集等を手がけるとともに、芸備各地へ出かけて地元の人と交流を深め、多賀庵一門は芸備俳壇の中心的存在となりました。多賀庵の傍系には野坡の高弟の一人、世並屋(よなみや)半江(はんえ)によって結ばれた養花園(ようかおん)もあります。しかし、芸備の俳壇は多賀庵一色というわけではなく、もう一方に広島藩士出身の飯田篤老(いだけろう)が始めた篤老園(あつらうゑん)があり、篤老にも多数の門人が集まりました。寛政五年(一七九三)は芭蕉の百回忌に当たり、全国各地でその句碑が建てられました。芸備地方でも、この前後に尾道・三原・川尻など多数の句碑が地元の俳人たちにより建てられています。このように、江戸時代、広島以外にも小さな俳壇が芸備各地にあり、句会を催したり句集を刊行したりしていたことがわかっています。

◆「蝶鳥や」

承応・明暦頃(一六五〇年)

保田(義郎) 家文書三〇六「書画類集」

福山第二代藩主水野勝俊(みづのかつとし)に仕えた俳人、野々口立圃(ののぐちりゅうぼ) (一五九五〜一六六九)の俳文。

立圃は、江戸時代初頭、即興性を重視し、それまで以上に俗言や滑稽(まじけ)などを取り入れ、「貞門俳諧(ていもんはいかい)」を確立させた松永貞徳(まつながさだのり)の随一ともいわれた門人。立圃は慶安四年(一六五二)に五十七歳で福山へ来住し、五年余りの間に福山地方の俳諧興隆の基礎を作った。立圃は「尊朝流(そんてうりゅう)」という書流を確立した青蓮院宮尊朝(しょうれんいんみやうそんてう)法親王の門人でもあり、その流麗な筆跡は書家としての評価も高い。



友にハ雪月花・茶・酒・芸能
などの品々こそあれ、俳諧の
あたことハおさな友達の心して、
たかひにいへる事にしたかふ時
も、又さからふ所もあり、こころを
くらへあひて後ハいさかひニなり、
あなたハ勝ん事をたくミ、こなたハ
まけしとはけむ、いはハ景清と
ミおのやか笑らひて左右へたち
のくに似たり、見る人もさそおかし
からんと思ひながら、目なしとちく
さのミ前うしろわきまへさる事
なるへし

蝶鳥や
目なし
とちく
春霞
立圃 ㊦

伊香員般雅丈

◆「俳諧癖物語」(二冊)

宝暦十年(一七六〇)

保田(義郎) 家文書三〇六

「癖物語」は多賀庵風律(たがあんふうりつ) (一六九四〜一七八二)が著した俳諧の作法書。二冊ともその写本で、その序文と、発句の切字(きぎじ)について解説した部分を展示した。

元禄七年(一六九四)に松尾芭蕉が没すると、各務支考(かたみし)や志太野坡(しのだのぼか)など、その門人たちが相次いで芸備を訪れ、蕉風の俳諧を伝えた。芭蕉の高弟の一人、志太野坡に就いて頭角を現し、芸備俳壇の中心となったのが多賀庵風律であった。

広島城下塩屋町(中区紙屋町)に生まれた風律は木地屋保兵衛(きぢやへいべゑ)と言ひ、代々塗物を商っていたが、隠居後は野坡を招いた広瀬村(中区堺町)油池の別邸の庭へ陸奥国(むつみくに)の多賀城(たがぎ)に模した碑を建て、それにちなんで多賀庵と称した。この多賀庵の系統がその後の広島俳諧の主流を占めるようになった。

◆多賀庵風律俳句短冊

竹島浅吉氏收集文書五

「みよしのや 人もおくめる 花さかり」。「おくめる」とは奥ゆかしく、趣のあること。



◆「ささの葉」

(俳諧篠葉集) 宝暦十三年(一七六三)

保田(義郎) 家文書三〇一

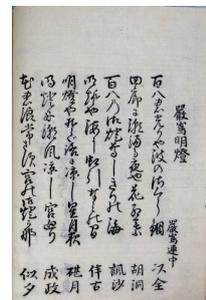
「ささの葉」は多賀庵風律編による俳諧撰集。風律とその門下と知友の発句・連句を四季別に載せて

いる。宝暦十三年に京都の額田正三郎が開板しているが、これはその写本である。序文は風律の高弟の一人である春草舎青雨が寄せている。

「さゝの葉」の開板は野坡が来広して五十年に満たないが、これに発句を載せた俳人の肩書きは、京・江戸・九州・中四国のほか、芸備では、大竹・廿日市・宮島・草津・安村・可部・河戸・高田・吉田・有田・吉木・小国・乃美・三原・尾道・福山・備後府中など広範囲に及ぶ。これは俳諧の波が、瞬く間に芸備の隅々まで、裕福な町人や農民へと広がっていったことを示している。

◆『**厳島八景**』上・中・下 元文四年（一七三九） 吉井家文書

『**厳島八景**』（三巻三冊）は、元文四年（一七三九）、**厳島明燈**（いつくしまめいとう）、**大元桜花**（おおもとさくらばな）、**滝宮水虫**（たきのみやのほたる）、**鏡池秋月**（かがみいけのあきのつき）、**谷原麋鹿**（やつがはらびろく）、**御笠浜鋪雪**（みかさのまほせつ）、**有浦客船**（ありのうらのかくせん）、**弥山神鴉**（みせんしのしんあ）という「**厳島八景**」に関する和歌・漢詩・連歌・俳諧発句を集大成し、出版したもの。このうち下巻は、志太野坡の序文によると、**厳島・光明院の前住職恕信**の依頼を受け、**厳島八景**を詠んだ発句を弘く門友に求めて編集したと言う。これには二一九人、合計五四九句の発句が収められるが、肩書きに住所がない作者も芸備の俳人と考えると、その数は一二〇人に及ぶ。撰者は「**浅生庵野坡門人厳島連衆**」、巻末の刊記には「**厳島松竿舎藏板**」とあり、**厳島の俳人**たちにより刊行が計画されたものと考えられる。



『**厳島八景**』下

◆「**蟹の穴**」 安永九年（一七八〇） 保田（義郎）家文書三四二

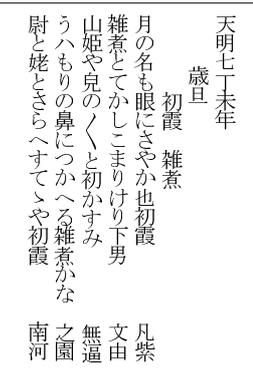
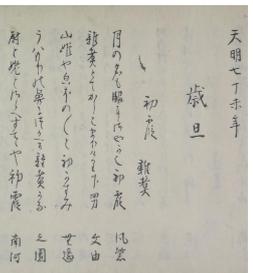
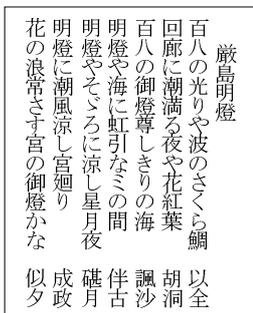
多賀庵風律と同年代の俳人で、志太野坡の門人であった**梅北**（一七〇〇〜一七八三）が著した俳文。梅北は**広島**の人で、本名は**次屋権七**、又は**室屋権七**としたものもある。

梅北は俳文が得意で、「**俵舛概の伝**」（享保二十年）、「**瓢説**」（天明元年）などの作品があり、中でもこの「**蟹の穴**」が有名である。広島藩の儒者である**頼春水**と親しく、「**春水日記**」にも名前が出ている。

- ◆『**歳旦**』 安永八年（一七七九） 宇都宮家文書
- ◆『**多賀庵 歳旦**』天明七年（一七八七） 岡崎家文書
- ◆『**歳旦**』 天明三年（一七八三） 小都第二氏収集資料

広島**多賀庵**（野坡系）では、安永年間以降、毎年のように「**歳旦**（集）」と言う句集を刊行した。安永八年と天明七年の二冊に刊記はないが、天明三年の刊記には「**書林春艸堂 彫刻柏葉堂**」とあり、広島で刊行されたものと分かる。

「**歳旦集**」とは、俳諧の師匠などが、一門の俳人たちと元旦に年頭の祝意を込めて詠んだ**歳旦吟**を印刷し、門人や知友に配った摺り物のこと。俳諧が盛



んになると、「**歳旦集**」の刊行は連歌時代の「**歳旦三つ物**」の後を受けて流行した。「**歳旦三つ物**」とは、**歳旦**の祝詞として連句の巻頭である発句（五・七・五）、**脇句**（七・七）、**第三**（五・七・五）の三句だけを独立させたもの。俳諧の宗匠家ではこの「**歳旦集**」の刊行が正月の慣例行事となった。人々はこれを買って求めて、各流派の勢力の消長や、作句の傾向と技量を評判しあつた。

この「**歳旦**」に複数の俳人の句がまとめて載せられている芸備の地域は、**可部・安邑・廿日市・宮内・五日市・宮島・白市・丹名・瀬戸・阿賀・中ノ村・有田・三次・吉田・草津・上甲立・狩留家・大河・乃美・戸河内・能美島・竹原・尾道・三次・吉田・西調子・入江・南方・高屋・向灘・矢野・呉町・波多見**など多数に及ぶ。

- ◆『**やまかつら**』 文化十年（一八一三） 吉井家文書
- ◆『**やまかつら**』 文政二年（一八一九） 小都第二氏収集資料
- ◆『**やまかつら**』 文政三年（一八一〇） 吉井家文書

『**やまかつら**』は、広島**多賀庵**三世**玄蛙**によって創刊された**多賀庵**一門の年間句集。展示した三冊はいずれも**玄蛙**の編纂になる。創刊年代は不明である

が、所蔵者の一人であった小都男^{おつゆめし}二氏によると、戦前の旧浅野図書館（現広島市立中央図書館）には、文化七年・八年のものが所蔵されていたと言う。一時途絶えたこともあったが、三世玄蛙から四世筵史^{えんし}・五世齋年^{さいねん}へと受け継がれた。刊記は文化十年と文政二年が広島平田屋橋西詰の島屋（広岡）彦兵衛、文政三年は広島堺町三丁目の松村清兵衛である。

『やまかつら』に序や跋^{びやく}はなく、文化十年は、巻頭に半日庵（風律の高弟の一人古江^{こゑ}）蔵の「蓬萊に聞かはやいせの 初たより」と言う芭蕉の句を翻刻し、歳旦の発句（七十四歳の古江など高齢者の句から始まる）から夏・秋・冬、歳暮と続き、最後に、主催者である玄蛙の挨拶句（発句）に始まる「多賀庵之春興」など連句へと続く。多賀庵一派だけでなく、芸備の俳人や広く日本各地の俳人の句も載せており、他の「やまかつら」もほぼ同様の構成となっている。

◆『夢のあした』文化十五年（一八一八）吉井家文書

多賀庵四世筵史^{えんし}（二七三）〜一八四〇編集により文化十五年に刊行された句集。筵史の本名は茶屋宗七で、広島に生まれ、多賀庵二世六合^{ろく}の養子となった。

この句集は、春・夏・秋・冬・混雑の発句四七六句と、筵史と梅十・土方・美角・甘古が詠んだ挨拶句（発句）に始まる歌仙・半歌仙の連句などからなる。発句が五・七・五で完結するのに対し、連句は複数の人が集まった中から、宗匠がまず五・七・五（挨拶句）を詠み、次に七・七（脇句）を付句し、更に五・七・五（第三）を付ける、といった具合に、五・七・五・七・七の歌を共同制作する形をとる。三六句を連ねるのが「歌仙」で、その半分の一八句

の連句を「小歌仙」という。

たとえば、筵史が「うくひすの 涙かしらぬ 樹の雫」と詠んだ挨拶句は、呉津が「風芳しく朝日さす山」と脇句を付け、さらに、常坂が「根来榎 男くらしの 長閑にて」（第三、「いとまいとまにならす鋸」と続く。この歌仙には一四名が参加している。

◆『養花集』 天保十二年（一八四一）

千葉家文書二二七―七

『養花集』は、養花園和切（？）〜一八四一、釣燈屋市兵衛、竹村氏編集による句集。多賀庵風律の高弟で、俳諧の奥旨秘巻の書類を託された古江（世並屋市郎左衛門、寺田氏）は、養花園と号するようになり、多賀庵の傍系となった。古江の後に養花園を継いだのが和切であった。

『養花集』には、和切の挨拶句による歌仙（連句）に続き、高弟の素台や一鳳ら多賀庵一門だけでなく、広島近隣や芸備各地、全国各地から広島を訪れた俳人の句まで、総人数四二一人、総句数六〇五句が掲載されている。これは和切が流派にとられず、広範囲に俳人と交流を図ったためである。

◆『篤老園自撰句帖初編』乾文政二年（一八一八）

平賀家文書一〇六五九・一〇六六〇

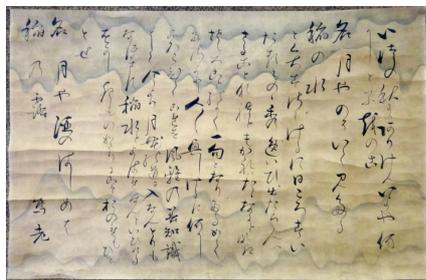
『篤老園自撰句帖初編』（二巻二冊）は、飯田篤老（二七八）〜一八二〇自撰による句集。このうち乾巻は自身の句集（全四四三句）、坤巻は「千々の梅物語」と題した篤老の半生記及び俳文集となっている。

篤老は町方歩行組の広島藩士で、名は利矩^{りむ}、通称は慎平、俳号は篤老園などである。はじめ広島で

俳諧を多賀庵六合等に学んだ後、十九歳で上京して俳諧を高桑蘭更^{たかこうらんせい}に学び、「関西一人」と称されるに至ったが、文化五年（一八〇八）に帰広、飯田家を継いで町方吟味役となった。多才な優れた文化人として知られ、文政二年（一八一九）には広島城下の地誌である「知新集」の編纂を完成させている。多賀庵を中心とする広島俳諧に飽き足らず、少数精鋭の同志と大鳴社を結成して活動を始め、多数の俳書を刊行すると共に、多数の門下生を抱えるようになり、広島で多賀庵と並ぶ勢力となった。大坂の塩屋忠兵衛と共に刊記に名を連ねる堀川町隅田屋平蔵（春魚）・中島本町世並屋伊兵衛（牛棟）・京橋町和泉屋新蔵（甘古）の三人は、いずれも篤老門下の俳人である。

◆飯田篤老俳文書幅

竹島浅吉氏収集文書一〇



いつの秋にやありけん いやや何かしのといふをど、
名月や のそいで見たる
稲の水
とくちすさみけるに、日ころすいたるもの、秀逸、いひ出たらんハ
さることなれども、かれはたんなにとなき
そることのかく一句となりたるめて
たさよと、人々興しけるに、何かし
よるこひて、これを風雅の善知識
として、今より月花の道に入なん、とりも
なほさす稲水とよはれなんといひける、
をかしきものかたりにこそ、おのれもひと
とせ
名月や酒のはしめは
稲の露
篤老

◆『温泉津日記』上・下 文政三年（一八二〇）

平賀家文書一〇六五七・一〇六五八

飯田篤老は、文化十年（一八三三）に許しを得て、脚疾治療のため石見国温泉津へ湯治に出かけた。二月二十二日に駕籠を雇って広島を出発、石見街道を長束から八木、可部、本地、中山と進み、新庄からは温泉津道に入って、出羽、川本を経て二十六日に温泉津へ着いた。入浴は三十七日間で二〇九回に及ぶ。四月三日に温泉津を出発、帰途は更に有福温泉でも入浴、石見街道を今市、市木、新庄、本地、可部を経て七日に広島へ帰着した。湯治の甲斐あって「全快とはいたらすといへとも十に七八は起廢の効を得」と言う。

『温泉津日記』（二巻二冊）のうち、上巻「温泉津之巻」はその時の紀行文で、芭蕉の「奥の細道」のように、風物や人情などを織り込みながら旅行中に詠んだ発句を載せる。往路の八木村では「牛ほとに大事かるなり 梅の花」と詠んだ。下巻「螢之巻」は帰郷後の五月十四日、安芸郡中野村庄屋宅で催された螢見の句集、及びその庄屋七回忌に篤老門人たちが詠んだ追悼句集である。刊記は『篤老園自撰句帖初編』にもあった、篤老の三名の門人である。

◆『老梅集』（二冊） 万延元年（一八六〇）

平賀家文書一〇六六二・一〇六六三

『老梅集』は、古稀（七十歳）を迎えた月香園甘古（一八三三）の記念句集。巻頭に京都の歌人、千種有功から賜った書を写し、俳人でもあった山県二承・中西蘭陵（写真）が巻中の挿絵を描いている。

甘古は広島城下京橋町の商人で、通称は和泉屋新

蔵と言う。俳諧を飯田篤老に字ひ俳号を甘古と称した。『敵島奉納集』や『篤老自撰句帖』等の編集で師の篤老を助け、その校訂等に当たった。晩年には京橋の東岸に水楼（月香園）を構えて俳道に専念した。



月香園のあるしの古稀の賀に
岩か根の
苔や
すみれの
咲ちから
併題
蘭陵

◆六呂堂土方・蒼梧園一鳳・橋中庵大必等合作俳諧

竹島浅吉氏収集文書二八

六呂堂土方（一八〇一〜一八七〇）の本名は三笠屋平祐（若野氏）と言い、城下胡町の商家の出身で、飯田篤老に俳諧を学んで六呂堂初世となり、呉や瀬野方面に多くの門人を持った。蒼梧園一鳳（？〜一八八）は広島藩士（歩行組）二宮太郎八維貞で、養花園和切の門人となり、『養花集』ではその七傑の筆頭に挙げられている。広島以外では特に呉や仁方の俳人と親しかった。橋中庵大必（一八〇一〜一八八四）も広島藩士（歩行組）で、梶山量介と言い、俳画をよくし、幕末広島俳諧最後を飾る宗匠の一人で、芸備雲石の諸所に門人がいたと言う。

◆呉竹庵雨洗の母追善の俳諧 享和三年（一八〇三）

河野家（本河野）文書二二

呉竹庵雨洗（一七六二〜一八二五）は母の亡くなった翌日、「朝顔のはなよりも猶あたるはきつとあとな

き露の玉のを」、四十九日に「藤衣かふるかきりは中々になげきをそゆる日数とそおもふ」、百か日法要には「はれ曇るそらこそあらめ今日の袖の涙のしぐれいかにほすへき」「今日の袖のなみたにたかふ時雨かな」と詠んだ。

十九世紀になると、俳諧は中流以下の町人層や、山間や浦島の裕福な農民層へと浸透していった。雨洗は、賀茂郡川尻村（現呉市）の村役人である白石屋（河野家）に生まれ、通称は幸四郎、諱は信義、東舛とも号した。弟に家業を譲って自らは呉竹庵と言う草案に隠居し、草花を愛でて俳諧に没頭した。呉竹庵では川尻村内外から俳人が集まって句会が催されている。

◆呉竹庵雨洗追善句の短冊

文化十四年〜天保十年（一八一七〜三九）頃

河野家（本河野）文書二二

呉竹庵雨洗は、文化十二年（一八二五）十月に亡くなった。雨洗を追悼するために詠まれた追善句が河野家（本河野）に多く遺されている。これは追善句のうち短冊の一部。左から「呉竹庵の師廿五回の仏前にささぐ、たちやすき弓矢の的を時雨けり 有中」「追悼 消るものと おもハぬ月の霜夜かな 紫芹」「神無月二日は雨洗のうしの七周の正忌なり、卯月の二日とりこしの仏事にまねかれて 卯の花の露に袂の濡にけり 蝶素」「追善塚に置 霜も名残の七日哉 つな一」「呈廟前 此山の時雨はしめや二むかし 亥月」「追悼 おとに聞く 姉はの松も 冬野かな 玉鳴」。このうち、有中は仁方村の俳人。蝶素は川尻の光

明寺住職と思われ、雨洗の竹馬の友。つな(綱)も川尻の俳人、玉鳴は三津村の俳人である。



◆仁方連の呉竹庵雨洗追善句 文政四年(一八〇三) 河野家(本河野) 文書四

雨洗の七回忌に当たる文政四年に、賀茂郡仁方村の俳人仲間「仁方連」が出版した追善句集。翌文政五年に、「雨洗の弟である梧由が発刊した雨洗の追悼集『時雨草』」には、雨洗ゆかりの人々二〇人の俳句が採録されている。その中には賀茂郡では川尻・仁方・広・阿賀・黒瀬・西条・白市・内海・三津・竹原、その他、豊田郡・広島・倉橋・三原・尾道・吉田・狩留家、更には大坂・京・伊勢・江戸の著名な俳人が句を寄せている。雨洗たちが幅広い俳人と交流していたことがうかがえる。

◆「鶴亭日記」第三巻ほか 文化十一年(一八二四) 野坂家文書四九二―二

「鶴亭日記」(全四六巻、第一巻は欠、文化四年〜天保十一年分が現存)の作者である野坂完山(一七五五〜一八四〇)は、賀茂郡寺家村の医師であり、柴籬と言った俳号を持つ秀でた俳人であった。柴籬は最初川尻の呉竹庵雨洗の門人であったが、その没後は広島島の飯田篤老に就いて俳諧を学んだ。「鶴亭日記」によれば、柴籬は芸備各地へ往診する傍ら、その先々で俳諧の興行も行っている。

たとえば、柴籬は文化十一年十一月十日から十二日にかけて川尻浦を訪れ、十一日と十二日の両日、師匠の呉竹庵雨洗と俳諧連句の興行(呉竹庵興行)を行っていることが、「鶴亭日記」に描かれている。

◆「木容庵百千鳥」(二冊) 文化十三〜十四年(一八一六〜一七)

◆「鶴亭百千鳥」 文政二〜三年(一八一九〜二〇) 野坂家文書五六―一

「木容庵百千鳥」と「鶴亭百千鳥」は共に野坂完山(柴籬)の句集。

柴籬は、西国街道四日市駅を

通行する全国の俳人も広く交流を深めている。

「木容庵百千鳥」上巻の冒頭は下総の行脚尼素月と、下巻の冒頭は浪花の行脚俳人万羽と、孤月庵(寺家村正福寺の庫裏)で催した句会で詠まれた連句(二八句の半歌仙)である。文化十四年に名前が載る玉斧は正福寺住職大音の俳号である。

「鶴亭百千鳥」では、文政三年五月一日に秋田の行脚俳人が完山宅を訪れ、折から逗留中であった広島島の多賀庵筵史と三人で句会を催した(鶴亭興行)。



松尾芭蕉の句碑

寛政5年(1782)は松尾芭蕉の100回忌に当たり、俳諧が盛んな芸備地方では各地にその句碑が建てられた。

- (1) は、尾道市千光寺公園・文学のこみちにある芭蕉句碑「芭蕉翁 うきわれを 寂しがらせよ 閑古鳥」。前年の10月12日、尾道に滞在していた長月庵若翁が当地の俳人52人と芭蕉百回忌の句会を催し建立された。
- (2) は、三原八幡宮にある芭蕉句碑「旅人と 我名よはれむ 初しくれ 祖翁」。この句碑の由来は不明。近くの西野村西福寺には百回忌の句碑「芭蕉翁 烏梅之香に のつと日の出る 山路かな」がある。
- (3) は、寛政11年(1799)呉市川尻町久筋に建てられた薫風塚「松杉や ほめてや風の 薫る音 芭蕉翁」。これを建てたのは川尻俳諧の始祖である清陽館金竟と、後に呉竹庵雨洗と改名する薫風亭東舛である。

二 広島 の 狂 歌 につ いて

狂歌とは「狂体の和歌」、つまり和歌の枠からはみ出し、社会風刺や皮肉、滑稽な内容を織り込みながら、五・七・五・七・七の三一音で構成した諧謔形式の和歌です。形式は自由で、「縁語」「掛詞」「本歌取」等を駆使して日常卑近な事物や生活を詠みます。

『万葉集』の時代から滑稽な要素を取り入れた和歌はありましたが、流行したのは江戸時代になってからです。元禄年間（一六八八～一七〇四）頃、俳諧でも名をなした松永貞徳が狂歌を嗜み、門下にも広めて、狂歌を広く庶民まで普及させました。天明寛政年間（一七九一～一八〇〇）には、江戸で黄金時代を迎えます。唐衣橋洲・大田南畝・朱楽菅江ら、豊かな教養と軽妙洒脱な機知を併せ持つ人々が次々と作品を発表し、市中の民衆はこれに熱狂しました。

芸備で狂歌が盛んになったのは、大坂の由縁斎貞柳（松永貞徳の孫弟子）の高弟として知られた芥川貞佐が、享保十三年（一七二八）に広島城下広瀬組大年寄芥川家に養子として迎えられたことが契機でした。貞佐の狂歌集『千代の梯』が出された玉暦九年（一七五九）、八代広島藩主浅野宗恒は町民から狂歌師を抱えるように命じています。このことから当時、広島でいかに狂歌がもてはやされたかが分かります。

貞佐の多数に及ぶ門流は、その正統を柳門と称し、免許を受けて貞の字を冠した雅号を用いました。その門下は広島から佐伯、呉、高田、三次へと芸備各地へと広まりました。三次の星流舎貞石の門下には更に庄原の連雲斎貞棧が生まれ、西城にもその門人がいました。このように、貞佐が起こした狂歌の波は備北にまで広まってきました。

◆ 芥川貞佐画像

芥川唯太郎氏提供

芥川貞佐（一六九〇～一七五九）は備中国笠岡に生まれ、若くから上京して、蹴鞠・三絃・尺八・点茶・卜筮など、ありとあらゆる芸能を極めた。大坂の由縁斎（油煙斎 貞柳（松永貞徳の孫弟子で、狂歌中興の祖）に狂歌を学び、その高弟として知られ、桃縁斎貞佐を雅号とした。享保十三年（一七二八）に広島城下広瀬組大年寄芥川家の養子となった。

貞佐には多くの門下生（柳門）があり、その一派は芸備各地へと広がった。辞世は「死て行 所はをかし 仏護寺の 犬の小便する垣のもと」という。

◆ 『狂歌千代の梯』宝暦九年（一七五九）岡崎家文書

「狂歌千代の梯」は、芥川貞佐撰による広島狂歌界における記念碑的な作品集。貞佐と同じ由縁斎貞柳門下の尾張の狂歌師 永日庵其律の序文によると、貞佐が其律に依頼し、秋園斎米都など名古屋の狂歌師の協力を得て撰集したものと



言う。刊記は、広島播磨屋町の本屋仙助と浪花の伊丹屋佐助の連記となっている。貞佐と其律（廉郷）や米都などの作品と共に、芸備を中心とする貞佐の多数の門人の作品を載せる。

永日庵廉郷

からうすに

心のしらけ

さとり得て

ほさつも

あしのしたに

こそ見れ

狂歌 千代の梯

貞佐

来る春の姿へとそそりそこに柳の風かそれく

四十歳の春に 米都

山伏の老のはしめと聞時八門出もよきと朝の初春

縫あけをと朝おろして若松の霞のきぬに裾もかくなく

一夜明れや老か心もはたち山三保の松原かすむ町なみ

◆ 『狂歌寝さめの花』（二冊）安永六年（一七七七）小都勇二収集文書・岡崎家文書

芥川貞佐が亡くなる二年前、大坂の高弟玉雲斎貞右（混沌軒国丸）と共同で撰んだ狂歌集。大坂の刊行であるが、貞佐の弟子、広島扇縁斎貞中が序文を寄せている。前半はほとんどが芸備の貞佐門人の作品で、貞棧を初め「備後庄原」の肩書を持つ者が九名も確認できる。貞佐の門人は芸備だけでなく、京都や大坂にまで及び、人数は千人を越えたとす。大坂の狂歌界を二分した玉雲斎貞右もその弟子の一人であった。



狂歌集には挿絵も豊富である。写真は、貞佐の狂歌「松茸は父の齢をかさにきて ぶく尺八や

鶴の巢（こもり）に付けられた挿絵。

- ◆ 『狂歌桃のなかれ』 寛政五年（二七九三）
- ◆ 『狂歌韻のとも』 文化元年（二八〇四）

岡崎家文書



『狂歌桃のなかれ』は、芥川貞佐の門下、三次の星柳舎貞石撰による狂歌集。序文は広島石丈園芝郷、跋文は貞石門下である。庄原の連雲斎貞棧が誌している。『狂歌韻のとも』（写真）はその連雲斎貞棧

花盛 ちら
 する うち廻したる
 かせの 幕にや
 にくや 有らむ
 とて 柳々斎貞季

三月三日 貞棧
 雛祭りあかねまへたれ緋の袴在所娘もかりのおつほね
 広島福原氏 幸女
 ひな祭り宮もわうやも押なへて田舎も桃の花の都しや
 草餅 庄原故人 可周
 灸とハあちらこちら上蓬餅のひなに子供かすめて祝ふ
 桃酒 三次 花遊
 月も三ツ日も三ツに三ツの盃ハちやううしの揃ふけふの桃酒
 雛祭 花暁
 下戸たにもけふハ上戸にましハリて盃の朱に染めてもく色

の狂歌集。いずれも大坂書肆による刊行。『狂歌桃のなかれ』はほとんどが芸備の作家による作品である。中でも三次・庄原・本・川手・板橋・西城・東城・川西などの備北地名の肩書を持つ作家が目立つが、宮島・大野・廿日市・府中・海田・矢野・甲立・土師・壬生・尾道と言った芸備各地の地名も見える。女性の雅号もあり、狂歌が広く庶民にまで行き渡っていたことをうかがわせる。

- ◆ 『狂歌良夜之唸』（広陵 石丈園連中） 天明二年（二七八二）
- ◆ 『狂歌集』（安芸広陵 石丈園連中） 天明五年（二七八五）
- ◆ 『狂歌両節唸』（広陵連中） 天明九年（二七八九）
- ◆ 『狂歌春序詠』（安芸広陵連） 寛政五年（二七九三）
- ◆ 『狂歌三節詠』（星流舎貞石） 天明七年（二七八七）
- ◆ 『歳序唸』（三次星流舎貞石撰） 天明九年（二七八九）
- ◆ 『狂歌三節詠』 享和元年（二八〇一）
- ◆ 『狂歌三節唸』 享和四年（二八〇四）
- ◆ 『狂歌両節詠』 享和四年（二八〇四）

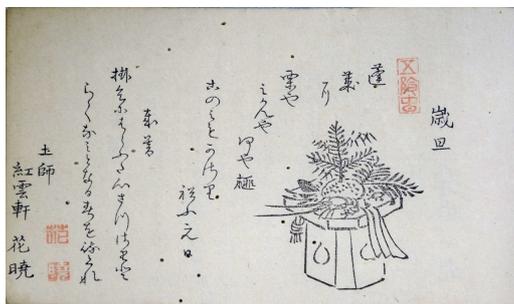
以上岡崎家文書

いずれも天明から享和年間にかけて芸備で刊行された狂歌集と思われるが、刊行など詳しい事情は伝わらない。俳諧に例えれば、年間句集である『歳旦集』のような性格であろう。左側が三次の星流舎貞石や庄原の連雲斎貞棧の撰によると思われる狂歌集、右側が広島石丈園連中「安芸広陵連」の撰による狂歌集である。

今回展示した狂歌集は、全て高田郡土師村・岡崎家文書を使用した。岡崎家は山県郡壬生村に出店の

あった商家で、屋号は「沖野屋」と言う。六代当主の十郎右衛門（二七五〇〜二八二五）は若くから文学を嗜んだ。俳諧に関しては広島島の多賀庵の門下となり、花暁と号して妹の「小さと」と共に句集などに名を残し、また、五徳斎貞杖その他の狂歌師を先達と仰ぎ、紅雲軒花暁の名前で狂歌も作っている（写真は『狂歌集』掲載の紅雲軒花暁の狂歌）。

十郎右衛門は天明二年（二七八二）春に三十三歳の厄年を迎え、厄払いの宴を自宅で催したところ、親戚知友その他が集まって和歌や俳句・漢詩を詠んだ。また、各地から作品の色紙や短冊・懐紙が寄せられ、八十余枚を数えた。中には、石見国市木村の住職、吉田の神主、広島からは俳諧の多賀庵六合、狂歌の石丈園芝郷など著名な文化人も多く含まれていたと言う。



歳旦
 蓬 葉
 栗や ミかんや 何や樞（かや）
 このミもかさり 祝ふ元日
 歳暮
 掛合にはらふた心さつはり
 らくなミとなる春を待く
 土師 紅雲軒 花暁

三 広島への出版について

江戸時代の出版は、京都・大坂・江戸の三都が中心でした。しかし、それ以外の地方都市でも出版活動が盛んに行われていたことが、大和博幸氏や西本寮子氏などの研究でわかっていきます。広島は江戸時代に一〇人以上の書肆（書物の出版又は販売する本屋）が確認でき、出版活動が盛んな一〇地域の一つでした。

広島で最初に出版されたのは、元禄十五年（一七〇二）の『厳島道芝記』でした。その後、俳諧と狂歌が隆盛するに連れて広島出版界は活性化します。寛政年間（一七九〇〜一八〇二）以後、芸備地域で出版された俳書は百点を超えます。

中でも、寛政末年頃から出版を始めた中島本町（現広島市中区）の世並屋伊兵衛は、自身も「牛棟」という俳号を持つ俳人で、篤老園系の俳書出版に大きく関与します。その後、『教訓道しるべ』や『芸備孝義伝』など広島藩の出版にも関わるようになった世並屋は、「文藻堂」と称して、広島城下でも最大手の書肆に成長し、新本・古本などの売買や貸本などまで事業を広げていくようになります。

現在でも芸備の裕福な商家や農家であった家には、必ずといってよいほど江戸時代に購入したと思われる多種多様な蔵書があります。その収書傾向によつて、当時の人々が何に関心があったかを知ることができます。これらの書物は、大部分が世並屋などの広島城下の書肆に注文し、そこを通じて江戸や上方の書肆から購入していたと思われる。

◆『厳島道芝記』一〜三・四（刊記）

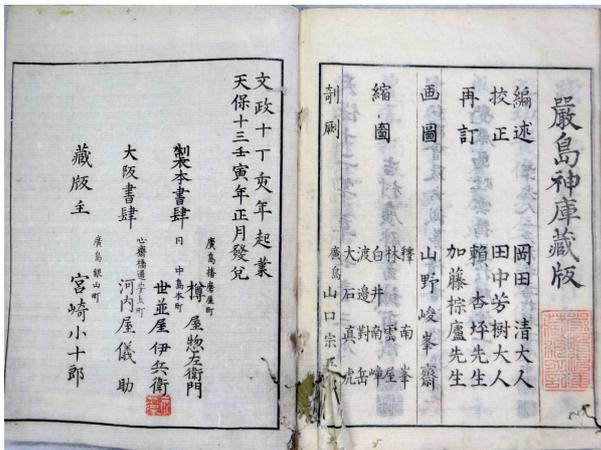
元禄十五年（一八〇二） 野坂家文書二五二

広島城下町に居住する小島常也筆になる『厳島道芝記』（全七巻四冊）は最初の本格的な厳島案内記。これを元禄十五年に京・江戸の書林と共同で、広島中通筋革屋町の石沼嘉兵衛が発行している。この石沼嘉兵衛が、広島で出版を手がけた現在確認できる最初の書林である。

◆『芸州厳島図会』巻一（扉）・巻十（刊記、写真）

天保十三年（一八三二） 野坂家文書二〇五

広島藩士の子に生まれた岡田清が著わした『芸州厳島図会』（全十巻十冊）は網羅的な厳島案内記。広島山口宗五郎が版木を彫り、広島播磨屋町の惣屋惣左衛門



と中島本町の世並屋伊兵衛、大坂の河内屋儀助が発行所となった。後に奉納された版木を用いて、厳島神社が大正十三年（一九一四）に増

刷した。

◆『増補訂正 塵劫記』 江戸時代末期

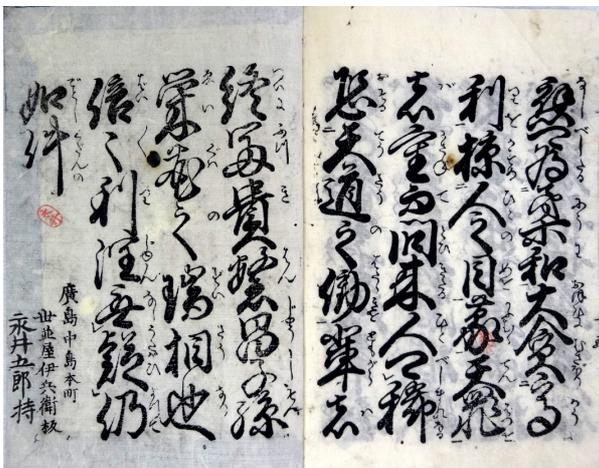
奥田隆太郎氏収集文書八七三

◆『新板校正 商売往来』 江戸時代末期

永井彌六氏収集文書一三三

いずれも広島中島本町世並屋伊兵衛が出版した寺子屋の往来物（教科書）。このような往来物が広島でも出版されていたことが分かり、大変興味深い。

『塵劫記』は、江戸初期の和算家、吉田光由が著した日本で最初の算術入門書。九九や、算盤のマニユアル的なことから始まり、当時の日常生活に必要な算術全般をほぼ網羅する。江戸時代の町民・農民は寺子屋などでこれを使い、算術の素養を身につけた。寛永四年（一六二七）に出版されて以来版を重ね、江戸時代を通じて大ベストセラーとなった。このため内容が少しずつ変えた異本が三百から



三百から

四百種類出版された。

『商売往来』も商売に必要な語彙やそれに関する知識、商人の心がまえなど、主に商人向けに作られた教科書。元禄七年（六九四）頃に成立したと言われ、語彙を羅列しただけのもの、ルビや返り点を加えたもの、図画を加えたものなど多種多様なものが出版されている。

◆『教訓道しるべ』（巻頭）寛政三年（二七九）
平賀家文書二二二二

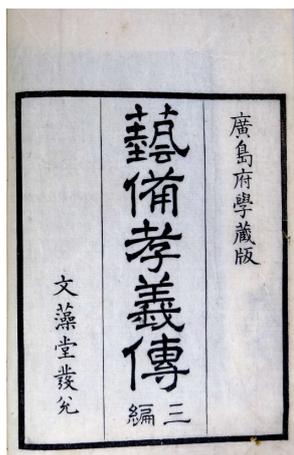
◆『教訓道しるべ』（巻頭）寛政三年（二七九）
兒玉家文書二六〇

◆『芸備孝義伝』三編巻一（扉、写真）巻十七（刊記）
天保十四年（一八四三）平賀家文書二一八四一等

◆世並屋伊兵衛『芸備孝義伝』広告
野坂家文書二〇五

『教訓道しるべ』と『芸備孝義伝』はいずれも広島藩が編集を命じ、刊行後も増刷され、続編が重ねられた書物で、いずれも世並屋伊兵衛が関与している。

百姓一揆に苦しむ広島藩は、十八世紀中頃から、



身分的な支配秩序や家族関係を維持し、倫理道徳を民衆に教え込むため、孝義人や

奇特者の表彰を行うようになった。表彰された孝義人・奇特者の記録が『芸備孝義伝』で、領内の割庄屋・町年寄・庄屋等に配付され、彼ら町村役人を通じて領内の民衆に読み聞かされた。孝順父母・尊敬長上などをルビ入りで説く『教訓道しるべ』は、寺子屋の教材としても使用された。

『芸備孝義伝』の初編とその続編の二編は、京都の書林から発行された。その編集に携わった頼杏坪は、その版木を取り寄せて世並屋に摺らせて希望者に安く売るようにしたいと藩に願い出ている。こうして三編と拾遺は広島で彫刻、世並屋伊兵衛が製本し、文藻堂（世並屋）から発行された。

◆『東照宮御祭礼略図絵』
文化十二年（一八二五）
千葉家文書二二五二

徳川家康の二百年忌に当たる文化十二年九月に挙



行される予定の、広島東照宮「通り御祭礼」の神輿行列を予告するため、同年五月に文藻堂（中島本町世並屋）から発行された行列絵図。
広島東照宮では家康の薨去後五十年（

とに、広瀬神社までの神輿渡御を伴う盛大な「通り御祭礼」が催され、その行列は二千人にも及ぶことがあった。

なお、平成二十七年（二〇二五）は家康の四百年忌に当たり、広島東照宮では、同年秋に「通り御祭礼」が復活する予定である。

◆『心学道の話』初編上（扉）・下（刊記）
天保十五年（一八四四）兒玉家文書二五〇・二五二

◆『心学道の話』八編下（刊記）安政五年（一八五八）
兒玉家文書三〇二

『心学道の話』（八編二四巻・四冊）は、広島藩士出身の心学者である奥田頼杖（一八四）の心学道話集。その初編は、天保十五年（一八四四）に広島で彫られ、京・江戸・大坂の三都と広島の子並屋伊兵衛から発行された。一二書林から発行された安政五年版の第八編（第二四巻）は、広島では書林が井筒屋勝二郎へと変わっている。

享保年間に京都の石田梅岩によって始められた石門心学は、儉約・堪忍・正直・忠孝などの封建的な徳目を身近な事例をもとに説き、自らの心の内面を磨くことによりそれを実践した。石門心学は領主にとっても都合よく、広島藩ではこれを保護した。このため、庶民に修身道徳を説いて回る広島出身の心学者も多く現れ、広島心学と称され発展した。心学に関する書物は当時のベストセラーであった。

◆『孝経外伝』全三（倉橋板）
寛政二年（二七九）頃

富永家文書二四八

『孝経外伝』は、儒学者の山崎闇斎が著した『孝



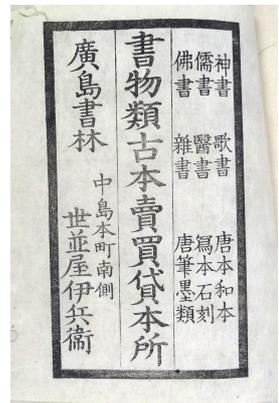
『経』の参考書で、明暦二年（一六五〇）に京都で出版された『孝経』は儒学の古典の一つで、寺子屋などでも子供たちの漢籍・儒学の学習に使われていた。

これは、安芸郡倉橋島本浦の敬長館で出版された『孝経外伝』である。敬長館は、寛政年間に、倉橋島本浦の有力者がお金を出し合って子弟を教育するために設立した私塾で、倉橋板の『孝経外伝』は、敬長館で使用する教科書として、倉橋の有志者の援助により出版された。

倉橋にはこの出版に使われた版木も保存されており、現在では呉市の有形文化財に指定されている。

◆**広島書林世並屋の広告**（『古文尚書標註』と『鎌倉北条九代記』）平賀家文書一〇四〇二・一一一三三五

写真右は『古文尚書標註』（天明三年に江戸・京で発刊）、写真左は『鎌倉北条九代記』（延宝三年に大坂で発刊）の裏表紙の見返しに貼られた広島書林世並屋伊兵衛の広告（広告年代は不明）。世並屋は、自らの広告を仕入れた書物に挟んで販売していたと思われる。



『古文尚書標註』の広告では「書物類古本売買貸本所」と中央に大きく明記している。取り扱う書物は「神書・儒書・仏書・歌書・医書・雑書・唐本和書・写本石刻唐筆墨類」とある。

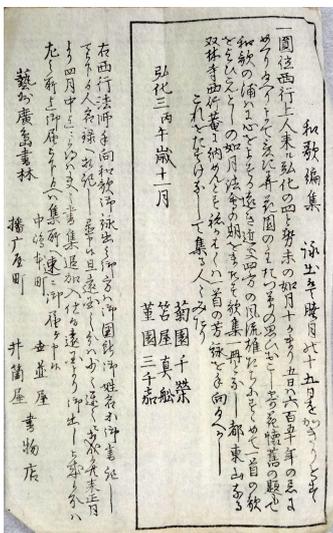
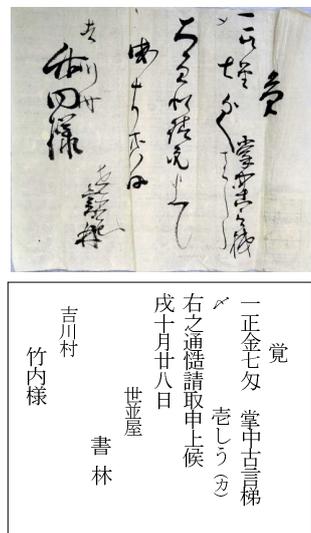
一方『鎌倉北条九代記』の広告では、書物の品揃えは更に豊富となり、短冊色紙・詩箋書翰紙や唐墨筆のような文房具まで扱うようになっていた。また、貸本を安価な見料で提供すること、売切れ品切れの書物でも早速上方へ注文して取り寄せること、古本売買を行うことなどをアピールしている。このように、世並屋は本の出版だけでなく、新本・古本や文房具の売買、貸本などマルチな事業を行う書林であったことが分かる。

◆**書林世並屋の書物代請取書** 年不詳

◆**西行法師手向歌集廣告** 弘化三年（一八四六）

竹内家文書五二四一四一五

右は、広島市の書林世並屋から賀茂郡吉川村（現東広島市八木松町）の割庄屋竹内家へ宛てた『掌中古言梯』と言う書物代銀の受取書。広島や尾道などの町だけでなく、郡部の割庄屋や庄屋などの村役人なども世並屋の顧客であった。左は、西行法師六五〇年忌に企画された歌集への応募呼びかけに対し、世並屋（中島本町）と井筒屋（播磨屋町）がそれを取次ぐことを知らせる広告。恐らく竹内家などの顧客へ送付したり、販売する書物に挟むなどして広報していたものと思われる。



和歌編集

詠出は睦月の十五日をかきりとす

一 円位西行上人来ル弘化の四とせ未の如月十がかり五日ハ六百五十年の忌に
めくり給へり、よて爰に弄花園の主たつ草の思ひおこし壹花懐旧の題もて
和歌の浦へ心をよする遠き近き四方の風流雄たちにすゝめて一首の歌
を乞ひ、こんとしの如月法会の期をまたず歌集一冊となし、都東山なる
双林寺西行庵に納めんとす、ねかはくハ一首の芳詠を手向給るへかし
これをたすけなして集る人とみたり

弘化三丙午歳十一月

菊園 千栄
苦屋 真船
菫園 三千嘉

右西行法師手向和歌御詠出之御方ハ御国所・御姓名等御書記し

可被下候、人名録へ相記し置申候、且遠国之分ハ少々遅々ニ相成候共来正月
より四月中迄ニ候得ハ夫々書集追加入仕候、遠国より御出し被成候分ハ
左之所迄御届被下候へハ集所へ速ニ御届ケ申候

芸州広島書林

中嶋本町

世並屋

井筒屋 書物店

播磨屋町

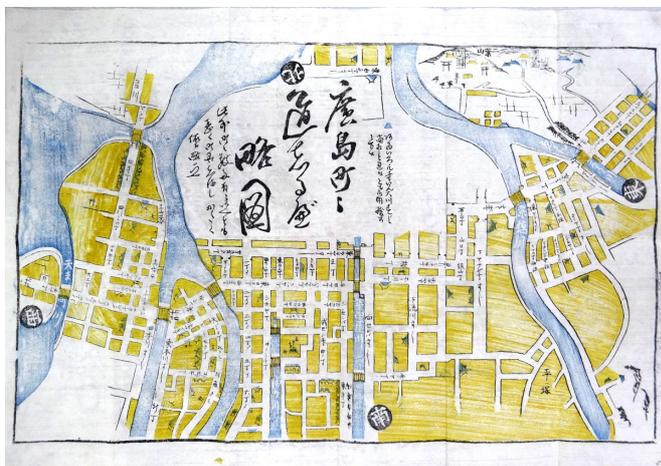
◆ 『広島町々道しるべ略図』

元治元年（一八六四）

波多野家文書

第一次長州征伐のため、広島へ集結した数万人も及ぶ幕府や諸藩兵士に、広島城下を案内する目的で摺られた絵図。残念ながら書肆などの記載はないが、江戸時代に発行された、広島城下町では珍しい木版色摺りの絵図である。

表題の右には「藍色はおよそ寺院・大川筋。（地図に）漏れがあつても御容赦いただきたい」、左は「このほかにも町は数多あるが、すべての町名を記すことは難しいので省略する」と記されている。



参考文献

- 広島県編・発行『広島県史』近世1・近世2（1981・1984）
- 倉橋町編集・発行『倉橋町史』通史編（2001）
- 川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会『川尻町誌』資料編・通史編（呉市役所、2007・2008）
- 下垣内和人『芸備俳諧史の研究』（赤尾照文堂、1974）
- 下垣内和人『近世芸備地方の俳諧』第1集～第12集（1964～1980）
- 下垣内和人『芸備俳諧資料』I・II・III（広島文教女子大学地域文化研究所、1986～1988）
- 宮尾敬三『芸備俳人短冊集影』（呉阿賀郷土資料研究会 1990）
- 米谷 巖「元文四年『伊都岐島八景 下』一解説と翻刻一」（広島大学文学部内海文化研究室『内海文化研究紀要』14、1986）
- 前原豊『野坂完山』（1996）
- 西島孜哉編『近世上方狂歌叢書』（近世上方狂歌研究会、1985）
- 福尾猛市郎「滄浪園の歴史」（広島県名勝滄浪園緊急調査団『総合学術調査研究報告「滄浪園」、1971』）
- 大和博幸「地方書肆の基礎的考察」（朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』、東京堂出版、1993）
- 西本寮子「世並屋伊兵衛素描—江戸時代後期の一書肆の活動をめぐって」（『広島女子大学国際文化学部紀要』12、2004）
- 西本寮子「古典籍から地域が見える」（『広島県立文書館だより』20号、2002）

「古典の日」連携事業（広島県立文書館・県立広島大学・広島県立図書館）

《広島県立文書館 収蔵文書の紹介展》

広島ゆかりの「古典籍展」

～俳諧・狂歌と広島出版～

展示期間 平成25年10月15日（火）
～12月27日（金）

場所 広島県立文書館展示室

〒730-0052 広島市中区千田町三丁目7-47
広島県情報プラザ2階

注：展示資料のうち『』は刊行資料、「」は写本であることを示す。